

マイクロポップにおける「未成年性」

—— 松井みどりによる奈良美智論に着目して

吉田 理紗 (京都工芸繊維大学)

美術評論家の松井みどりは、2007年に水戸芸術館で開催された「マイクロポップの時代：夏への扉」展と2009年に原美術館で開催後、海外諸国にも巡回した「ウィンター・ガーデン：日本現代美術におけるマイクロポップ的想像力の展開」展という展覧会のキュレーションを担い、二つの展覧会を通して「マイクロポップ」という新概念を提唱した。そこで彼女は「マイクロポップの方法」として6つの条件を掲げ、特定のイデオロギーに収束しない、主要な文化に対して「マイナー」（周縁的）な位置にある人々の芸術的な営みがマイクロポップ・アートであると規定し、その条件を満たすとする21作家を紹介した。しかし残念ながらこの「マイクロポップ」は、20世紀末から21世紀初めにかけての日本の現代美術を定義する概念（フレーム）としては定着していない。「マイクロポップ」は妥当性を欠いたタームなのか、あるいは「マイクロポップ」には秘められた可能性が残されているのか。発表者は1990年代後半から2000年代前半における日本現代美術とは何だったのかを明らかにするべく、現在では等閑視されている「マイクロポップ」の潜在的可能性を探り、松井の言説と同時代の批評言語ならびに実作品の分析を行なっている。本発表では、「マイクロポップ」に先行する世代と松井が位置づける作家のひとりである奈良美智を取り上げ、彼女が奈良を語る際に用いる「未成年性」とマイクロポップの条件の一つである「正当化された「大人」の思考や言語の法則や条件や、性別、年齢、国籍のような境界から逸脱する、子供や未成年の想像力を活かした表現。」を再検討することで、マイクロポップの輪郭を明確にすることを目的としている。

松井は1990年代半ば以降、つまり彼女が「マイクロポップ」という概念を用いる前からしばしば奈良の作品を論じてきた。彼女の奈良美智論において重要なタームが「未成年性」であり、これは「マイクロポップ」の議論に引き継がれていく問題である。そこで発表者は、松井の語る「未成年性」を時代ごとに整理し、実際の奈良の作品の特質との関係を再検討した。これによって明らかになるのは、特に奈良の2000年以前の作品において、暴力を連想させる傷をもつような子供の肖像において、その後の「マイクロポップ」に継承される「未成年性」が見出されるということだ。松井の奈良美智論に見られる「未成年性」の特徴は、その後の「マイクロポップ」におけるそれと暴力性や弱さを反転させた表現であることにおいて共通している一方で、「マイクロポップ」においてはより広義に用いられていることが明らかとなった。